

すずらん

血生臭い欲望がこびり付き
洗い流せぬ汚れた体液が
この身をかけめぐり、暗闇に笑いを招き

気狂いじみた密室の解剖に
張りつめた神経梢は繊維を曝し
逆立ちもままならぬ鉄格子を握り

ヒステリックな言葉で己を切り刻み
目まぐるしく空回りする脳髄に敗れ
もてあそぶ赤いボールのゴムの匂い

ふと・・・、風・・・、かすかな大気の流れ
白い小さな鐘が咳く
ああ、すずらん

すずらん・・・
そして、かすかな
かすかな 風

気まぐれな妖精が浮かび
白い小鈴を時折り揺らし
すずらん、・・・すずらん

鉄格子の間から腕を伸ばしても
触れることしかできない・・・涙が
その哀しさがどうしようもなく嬉しくて

あそこに囁いている
風が流れている
すずらん・・・、すずらん

(1985.5.1)